別紙様式

「ことばの教育」パイロット校事業　報告書

学校名	竹原市立忠海中学校
校長名	中　邑　徳　之
所在地	竹原市忠海東町三丁目９－１
ＨＰ	tadanoumi-j@hiroshima-c.ed.jp
学級数	4
タイプ	Ⅰ　・　Ⅱ

１　研究の概要

（1）研究主題

ＰＩＳＡ型「読解力」の育成をもとにした全教科の学力向上をめざして

―「ことばの力」を活用した授業改善を通して―

（2）研究のねらい

広島県の「ことばの教育」は，「ことばの力」は学習・生活面の基盤であると（平成18年度広島県教育資料）いう考え方をもとにすすめられている。一方，本校生徒は，ことばを使って自分の思いや考えを述べること，筋道を立て物事を表現する力が弱いことつまり，コミュニケーション能力と論理的思考力が弱いという課題があった。よって，ことばの教育を通して，ことばの力を育成して，最終的に教科学力の向上につなげていこうと考えた。つまり，「ことばの力」を育成すれば教科学力が向上するだろうという仮説に基づいて研究をすすめた。そこで，研究の柱としては，次の3点で取組みを進めていくこととした。

○「言語技術」習得による「ことばの力」の育成

○「ことばの力」を活用した教科学力の向上

○PISA型「読解力」の育成をもとにした授業改善

（3）研究組織・体制

○パイロット教員（昨年度・今年度），国語科担当を中心にことば委員会を設置し，校内研究組織をつくった。

○全教科で，共通理解をもって研究を進めた。

２　２年間の取組みの概要

（1）「言語技術」習得による「ことばの力」の育成

①ことば道場

各クラス週１時間（年間３５時間）で行う本校の「ことばの時間」（教育課程外）
５時間程度は，１～３年対象の習熟度課題別授業を実施。

○４つの単元（説明する，分析する，要約する，報告する）をもとに，国語科学習指導要領との関連を踏まえた各学年ごとの各時間における到達目標を明確にした３年間の系統的カリキュラムを作成し，それを基に指導する。

○パイロット教員を中心としてＴＴで授業を行う。

○「言語技術」習得のための基本的なトレーニングを行う。

②朝の思考表現道場

朝の学活を利用し，毎週月・水・金曜日に１０分間実施。全生徒に持たせた思考表現道場問題集（本校作成）活用。

○ことば道場の学習で課題となった「言語技術」，ことば道場でトレーニングをするためのさらなる基本的なトレーニングなど，生徒の学習課題に即して問題を行う。

③「言語技術」活用の日常化

各教科での「言語技術」導入，様々な表現活動の場の設定

（2）「ことばの力」を活用した教科学力の向上

○教科学力の向上（教科目標の達成）のためにPISA型「読解力」育成の視点をふまえるという考え方を取り入れる。

○各教科で，教科学力とPISA型読解力との関連付けを行う。

○PISA 型「読解力」育成のための指導の改善の具体的な方向と指導のねらいをふまえた学習の場を設定する。

○語彙力，表現力，論理的思考力を育成するために，情報獲得のための「言語技術」と伝達・表現のための「言語技術」を活用する。

（3）PISA型「読解力」の育成をもとにした授業改善

○意見交流（練り合いの場）の設定

・講義型授業から脱却する。
　課題解決のための思考やテキストをもとに情報を分析し収集し，自分の考えや思いを表現するための思考を行わせる。

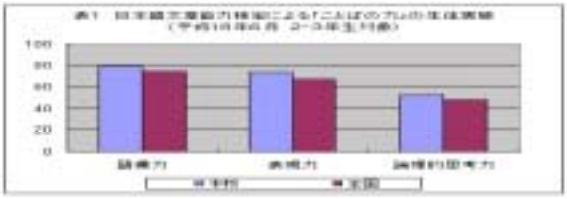
・主に情報収集のための「言語技術」と伝達・表現のための「言語技術」を活用する。

・発表が苦手な生徒のために，発表をスムーズにし，練り合いをすすめるための手立てとして発表プラカードを活用する。

３　研究の成果と課題

（1）成果

成果１　ことばの基礎づくり（ことば道場・朝の思考表現道場）での学習は「ことばの力」を向上させた。



ことばの力の向上を図ることができたかどうかについて，客観的に見取るために本年度6月に，日本語文章能力検定（5級～7級：5級は中学校2，3年生在学程度，6級は中学校1年生程度，7級は小学校高学年在学程度）で検証を行った。

具体的には，日本語文章能力検定問題において，出題項目と本研究での検証することばの力（語彙力，表現力，論理的思考力）との関連を，次のように捉えて実態把握をすることにした。

①語彙力・・・・・・・・・正しい語句

②表現力・・・・・・・・・正しい文，絵を伝える

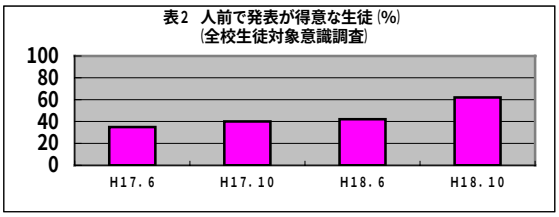
③論理的思考力・・・・・・文脈把握，伝言メモ，道順説明

本年，実施した日本語文章能力検定では，「ことばの教育」の学習内容を6回程度しか履修していない1年生が含まれているため，「ことばの教育」の効果が十分に反映されないと考え，１年生を除いた2・3年生を対象に，全国平均と本校の正答率を比較し，実態

把握を行った（表1）。

これを見ると，本校の2・3年生の正答率は，全てのことばの力において，全国平均より上回っていることがわかる。

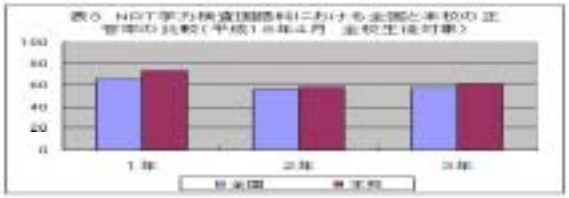
成果２　自分の考えや思いを人前で表現することが得意と思う生徒が増加した。



昨年度伸び悩んだ「自分の意見や思いを人前で表現することが得意に思うか」について２０%以上の増加を示し，１０月調査では６０%を超える成果を上げた。（表2）

このことから，課題であった「得意に思う」については，大幅に改善されたと言える。

成果３ 国語の教科学力が特に向上した。



本年度４月に実施したＮＲＴ学力検査の国語科における正答率について，全国平均と本校の生徒を比較してみると，どの学年も全国平均を上回っている（表３）。

このような成果が見られた要因を，次のように考える。

「ことばの教育」の学習内容については，全教科において関連づけ，取り組んでいるが，特に，国語科の学習内容との関連が深かったからである。

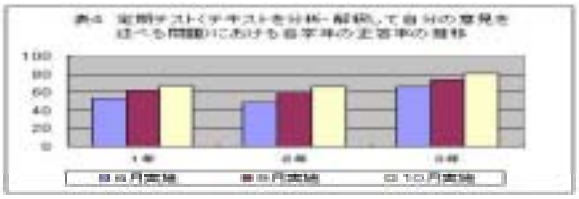
具体的には，「ことば道場」の単元に設定した「説明する」「分析する」「要約する」「報告する」の内容は，国語科においても取り組むべき学習内容であり，国語科の授業では単発でしか指導できない内容を，「ことばの教育」において，集中的にくり返しながら，深く学習することができたからである。また，結果的に，通常の国語の時間以上に国語科として学習することができ、さらなる効果を上げることができたからである。

成果４ グループ学習，発表プラカード，意見交流型授業の導入は，生徒に自分の考えや意見を発表しやすいと感じさせる指導の工夫として，有効であった。

「各授業の中で自分の考えや思いを発表しやすいと思う教科」についての生徒意識調査において，各授業で，自分の考えや思いを発表しやすいと思う生徒の割合は，６月は43．6%であったのが，１０月には，44．6%に増加した。特に国語，社会，理科においては，７０．4%→７８%と高い割合であった。

発表プラカードを活用した意見交流型（練り合い）授業の導入によって，生徒に自分の考えや意見を発表しやすいと感じさせる授業改善が進み，自分の意見を発表しやすいと感じる授業が増えたと考える。一方，教科の特性があり意見交流を中心とした授業展開が導入しやすい教科としにくい教科があることが，同調査における教科間の偏りを生んだと考える。

成果5　テキストを理解し，解釈しながら読む（ＰＩＳＡ型「読解力」）ことができるようになった



定期テスト（国語）において，PISA 型「読解力」問題（テキストを分析・解釈して自分の意見をまとめる問題）の各学年の正答率の推移をみると，確実に伸びた（表４）。他教科においても同様の傾向が見られた。

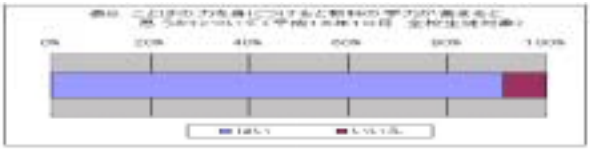
成果６　テキストを利用・分析して自分の考えを述べる（ＰＩＳＡ型「読解力」）ことができるようになった。

表5　考察を書くという学習において書かれた考察の内容評価とその該当人数(1年生)

判断基準	プレテスト(8月末)	1回目(9月下旬)	2回目(10月下旬)
無記入	15人	4人	0人
文章量はあるが考察になっていない	1人	6人	4人
結論のみ書いてあり根拠が不明確	10人	7人	10人
論理的，根拠を踏まえ結論が述べられている	0人	8人	11人

理科のレポートにおいて，科学的な思考力の育成について考察が書けるようになった（表5)。また，未記入が回を重ねる毎に減っており，１０月下旬では０人という状況である。

成果7 ほとんどの生徒が教科学力の向上にことばの力の習得が必要であると感じている。



上に示したのは，全校生徒を対象に，「ことばの力を身につけることによって，教科学力が高まると思うか」について意識調査を実施した結果である。（表6）

これによると，9割以上の生徒が，ことばの力を身につけることによって，教科学力が高まると考えていることがわかる。

（２）課題

課題１ 自分の考えを人前で表現することについて，不得意な生徒がいる。

自分の考えや思いを人前で表現することが得意と思う生徒は増加したが，発表が不得意に思う生徒も４０%弱おり，発表の仕方を理解させる取組みが必要である。

課題２ ことばの力を活用した授業改善に継続的に取り組んでいく。

授業改善によって，各授業で，自分の考えや思いを発表しやすいと思う生徒の割合は増加したが，教科間における変化の割合に差があり，今後もことばの力を活用した授業改善の継続的な取組みが重要である。